

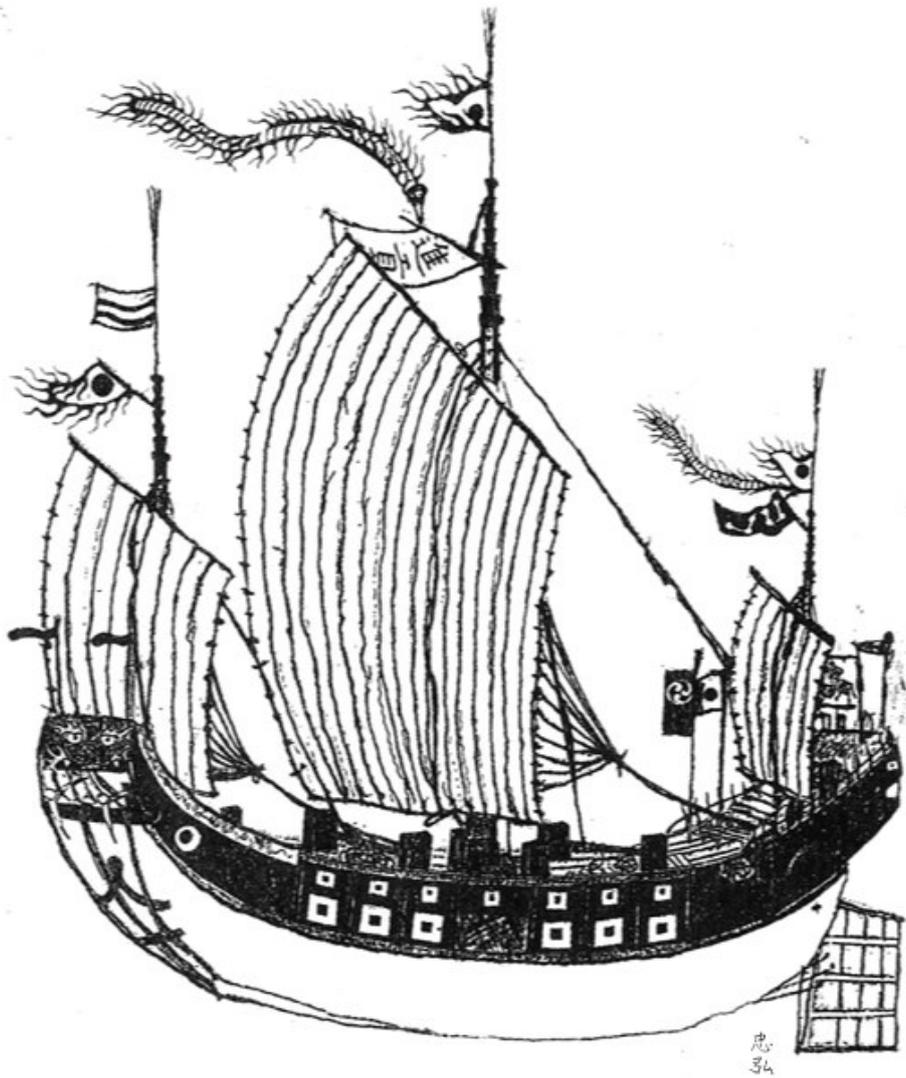
沖縄県立博物館・美術館【博物館】

博物館総合展示室

ガイドマニュアル

(第1版作成 2011年11月) (第2版作成：2017年 2月)

(第3版作製：ダウンロード版2018年 2月)



作成者 博物館ボランティア歴史勉強会
博物館ボランティア民俗勉強会
監修 博物館各分野学芸員

博物館ボランティア美術工芸勉強会
博物館ボランティア自然史勉強会

1 古我地原貝塚の世界 (1-2-1)

ここでは、沖縄の、縄文時代の人々の暮らしについて話しをします。

(1-2-1) これは、古我地こがち原貝塚ばるかいづかの模型です。今から、ざっと3000年~4000年前のことです。この頃、エジプトではすでにピラミッドが造られていました。



(1-2-1) これは古我地こがち原貝塚ばるかいづかの模型です。現在のうるま市石川の伊波いはという所にありました。模型から当時の人々の生活の様子を見てみましょう。



まず、丘陵の上に住居らしいのがありますね。これは、たてあなしきじゅうきょ竪穴式住居いはといひます。だれか知っていますか？そう、その通りです。(子どもさんによっては、クイズ形式で引き出しても良い)

家は直径が約3Mから10Mの円形型で

す。地面に穴を掘り、そこに数本の柱を立てて屋根を造りました。屋根は茅ぶきと考えられています。後で写真を見せますが炉やかまども付いていました。



次に、人々の様子を見てみましょう。まず、こちらを見てください。(時間を取る、指示棒などで指し示す) 手に魚を持っている人、海からの帰りでしょうか？



(別の場所を指して) ここでは、お母さんと子どもが何かしていますね。食事の準備でしょうか。そばに犬もいます。そのほかに人々のいろんな様子が見られます。どんなものがありますか？



森の中も見てみましょう。(質問をはさみながら、説明を加えていく) 以上見たように、当時の人々のくらしは狩猟やタキギ採集、貝や魚などの漁がおもなものです。

この古我知原貝塚から、実際に縄文人の生活の様子を示す土器などが出てきました。

(何かを捨てている人を指し示す) 何をしていますか? 崖の下にチリやゴミを捨てていますね。これが貝塚の元となるのです。それらの出土品を向こうの展示コーナーで見てみましょう。



(1-2-1)

まず、いちばん右側の棚の上の土器を見てください。よく見ると、形がすこし違いますね。これは丈の高い「深鉢形」の土器です。ものを煮たりするときに使われました。

これは口がすぼまっている(小さめの)「つぼ型」の土器です。水などを入れたと思われます。



次にその左側を見てください。貝や石などに見えますが、何でしょうか? 少し分かりにくいですが、石のオノ(石斧)や石の刃物(石刃)です。柄にしばりつけて木を切ったり、削ったりしたようです。



次にその左へ行きます。なにやらア
クセサリーみたいなものがあります
ね。これらは魚や動物の骨などででき
ています。お守りにしたり、祈りや拝
むときに身に付けたものと思われま
す。

(1-2-1)

それでは、棚の一番左側に行き
ます。こちらは、今までの石や骨
と違って生な感じですね。魚や動
物の肉でしょうか？(青い魚を指
さして)あの魚をなんと言いま
すか？この魚はイラブチャー(ブダ
イ)といいます。時々、スーパー
の刺身コーナーで見かけますね。



貝塚からは、イラブチャーの骨が大量に見つかっています。石器時代
の人達も現在とおなじようなものを食べていたことがわかっています。



(1-2-1)

次に、古我知原貝塚に
関する展示資料を見てみ
たいと思います。右側の
壁の写真を見てください。
こがちばるかいつか
古我知原貝塚を上空か
ら撮影した写真です。

- 人々のくらしを示すいろいろな遺物(大昔のひとたちが残した生活道具、土器など)や
- 遺跡(大昔のひとたちが残した生活の跡、住居跡や貝塚など)が見られます。



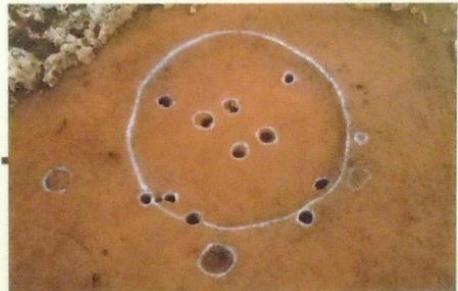
たてあなしきじゅうきよあと
竪穴式住居跡
 Remnants of Pit houses
 縄文人の家。直径3m、深さ数10cmの竪穴を掘り、数本の柱を立てて屋根をつくりました。

これが竪穴式住居です。

これが炉の跡です。



ろあと
炉跡
 Fireplaces
 火を使って料理をした場所。木炭や焼けた土などが見つかりました。
 Areas in which fire was used for cooking. Charcoal and burnt soil were found.




これが貝塚の跡です。

2 貝塚のムラから琉球王国へ (2-1-1)



ここは、貝塚のムラからグスク時代、三山を経て琉球王国が成立するとても変化に富んだ時代の展示です。

日本では鎌倉時代や室町時代の初め頃の12~15世紀に当たります。沖縄はグスク時代といわれ、琉球列島には大小さまざまな300を超えるグスクがありました。

(2-1-1)

グスク時代初期の遺跡
ちやたんちょうくしかねくぼるいせき
「北谷町後兼久原遺跡」から当時の人々の生活の様子を見てみましょう。

この遺跡から何がわかると思いますか？この遺跡では、

ひらちしきじゅうきよる
①平地式住居や炉のあと(煮炊きしたところ)

②高床式建物(穀物を貯蔵する建物)、砂鉄貯蔵穴(考古に写真あり)

はたけ くわこん
③畠(畑) 鋤痕(跡)

→ 鉄の使用があったことがわかる

④墓 などがあります。

この遺跡から人々は米、麦などの畑作農業をし、鉄の道具を使い生産物をたくわえ、人口が増加していき、ムラという集落が形成され安定していきました。その中で按司^{あじ}というリーダーが出てきて、権力をたくわえて集落をまとめていきました。

14世紀頃になると、按司たちは領地を広げるために争いをし、さらに海外貿易をおこない経済力を高めていきました。

より権力をもった按司たちは、砦としての立派な石積みのグスクを築き、そのグスクは次第に大型化していきました。



(2-1-2)

さて、このパネルをご覧ください。

いろいろなグスクがある中で、うるま市にある勝連グスクを見てみましょう。



勝連グスクは、当時のグスクの中でも大きなグスクでした。勝連グスクから出てきた遺物を見ると、いろいろな国と交流していた事がわかります。

青磁、染め付けの陶磁器や銅銭など、中国産のものが特に多く、中国との関わりが強かったことがわかります。

ほかのグスクからも同じように中国産の陶磁器などが出土しています。



また、刀、鎧などは日本からもたらされました。

3 琉球王国の成立 (2-1)



グスク時代の後半になると、それまで多くの按司によって支配されていた沖縄島は、このパネルからわかるとおり、北山・中山・南山という3つの国にわかれ、互いに勢力を争っていました。

今帰仁城を中心とした北山、浦添城を中心にした中山、大里城を中心にした南山、この時代を三山時代といいます。

中山の浦添には、舜天王統、英祖王統、察度王統があり、三山のなかでも最も強い勢力を持っていました。1372年に、中国皇帝と初めて正式な貿易をしたのも中山の察度王です。



<三山と朝貢貿易(進貢貿易)> (2-1-3)

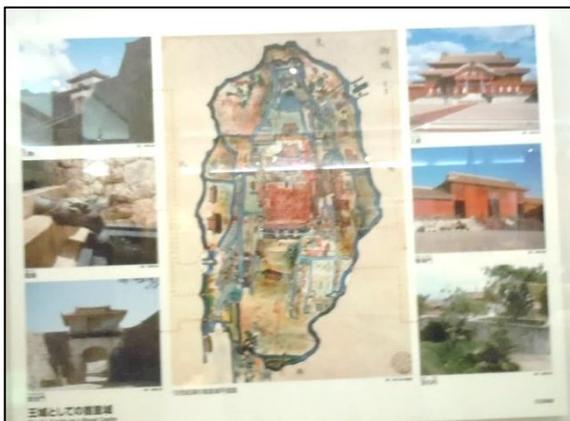
ところで、沖縄島で三山が争っていたころの中国では「明」という大国が建てられました。明の皇帝は「貢ぎ物を贈って臣下となるように」と、周辺の国々に使者を送りました。



1372年、中山の察度はこれに応じ弟の泰期を使いに出して貢ぎ物をおくりました。このように、貢ぎ物を贈り服従を誓う事を朝貢といいます。朝貢貿易については、こちらのPCの中で詳しく説明していますので、あとでご覧ください。

このような朝貢貿易は、北山・南山も競っておこなっていました。三山時代に始まった朝貢貿易により琉球の貿易国家としての基礎が築かれたのです。

〈三山統一から琉球王国成立へ〉 (2-1-3)



さて、三山時代も1人の按司によって統一されていきます。1406年、佐敷グスクからでた尚巴志という按司が浦添グスクの中山王を打ち倒し、父の思紹を王位につかせ、自分は世継ぎとして父の政治を助めました。

さらに北山の今帰仁城を討ち、自ら王となった尚巴志は1429年南山も討ち、ここに三山を統一して沖縄島全体を支配しました。

尚巴志は首里城を王城と定め、ここに琉球王国が成立しました。尚巴志がたてた王朝を、「第一尚氏王統」といいます。その後第二尚氏王統を経て、琉球王国は約500年にわたって歴史を刻んでいきます。



(2-1-4)

王城としての首里城からは、外国産の陶磁器など、たくさんの遺物が発掘されています。

政治、経済、文化の中心地として繁栄した様子がよくわかります。

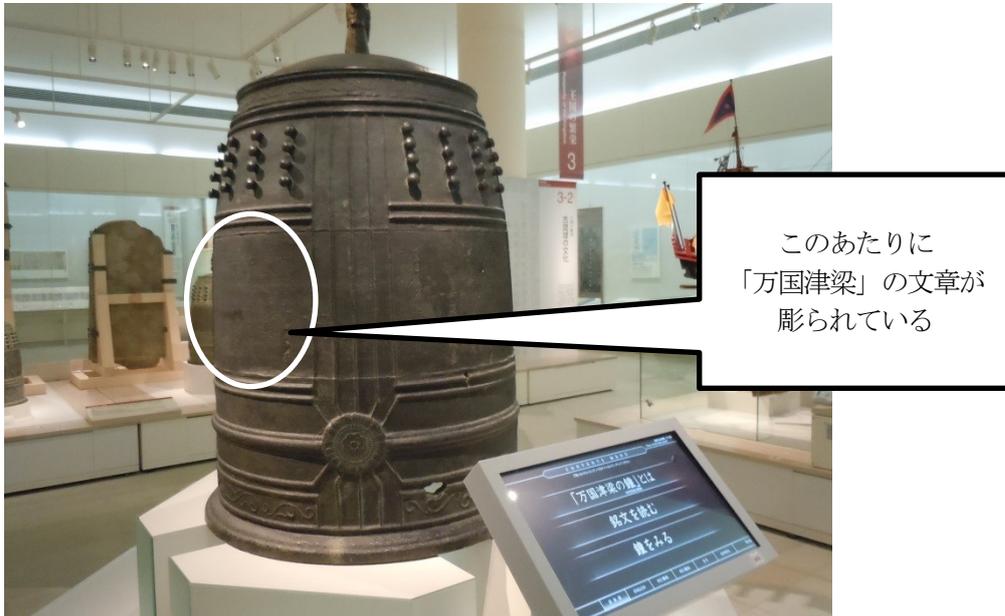


(3-2-1)

1427年に建立された「安国山樹花木之記碑」から、首里城外苑や人工池の竜澤の整備が行われていることがわかります。

このことから、外苑の整備以前に首里城が存在していたということがわかります。(県指定有形文化財)

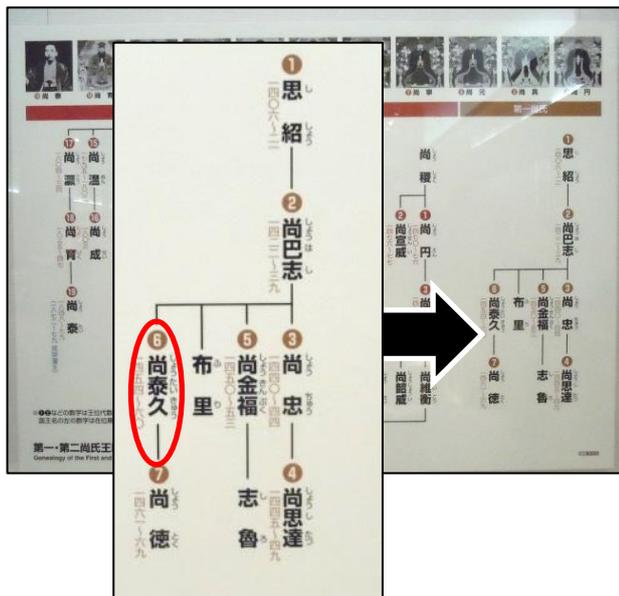
4 旧首里城正殿鐘 (3-1-1)

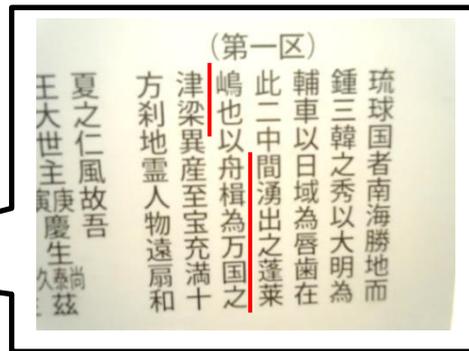


この大きな鐘は、首里城の正殿に掛けられていた鐘ということで、「旧首里城正殿鐘」、「首里城正殿の鐘」と言われています。国指定の重要文化財です。材質は青銅でできていて、高さが154.5 cm、口の直径が94 cm、重さが721 kgもあります。

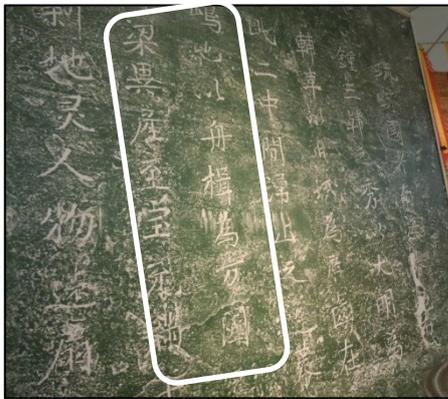
1458年に尚泰久王によって造られました。尚泰久王は琉球王国のどの時代の王様であったかは、「王国の繁栄 統一王朝の時代」のコーナーにそれぞれ王様の名前が書かれていて、わかるようになっていますので、あとでご覧になってください。

第一尚氏の尚泰久王の時代は仏教が盛んな時代で、多くの寺や鐘が造られました。この鐘はその内の一つですが、特にこの鐘は「万国津梁の鐘」とも呼ばれていて、とても有名です。鐘には四つの区画があって、それぞれに文章が刻まれています。





その文章の中に「舟楫をもって万国の津梁となす」という一節があります。この部分です。暗くて見にくいですが後ろのパネルに拡大してあります。ここです。



「舟を通わせて世界中の架け橋とする」という意味です。当時、海外貿易で活躍した琉球人の勇ましく積極的な様子が表現されています。

「万国津梁 = 世界の架け橋」という言葉は海外に雄飛する沖縄のシンボルとしてよく引用されます。名護には、2000年に行われた先進国首脳会議・通称「沖縄サミット」の舞台となった「万国津梁館」もありますね。

そのほかにも難しい文章が漢字で彫られています。その文章の全文がこれです。書かれている内容はさっき説明した、世界の架け橋となって交易を盛んにおこなって栄えているという事のほかに、

- 琉球王国が日本・中国・韓国の中間にあたること
- 偉大な尚泰久王が仏教を盛んにして琉球が平和になったこと
- 首里城正殿前にこの鐘を掛けたこと
- 鐘は藤原国善という人が造ったこと

鐘にある文書を作った人は相国寺の「溪隱」というお坊さんであることなどが書かれています。この鐘は沖縄戦の被害を受けたのでこんなに黒くなっています。鐘には銃弾の跡もあります。それから、この鐘が首里城正殿に掛けられていた事は間違いないのですが、正確な場所がわからないため、現在は首里城の正殿ではなく別の場所、「広福門」の前に「共屋」を建ててレプリカが掛けられています。(博物館に展示している津梁の鐘は実物です)

5 進貢船 (3-1-3)

(舟の模型を見てください)



しんこう
「進貢」と書かれた旗が見えますね。これはこの舟が進貢のための舟
しんこうせん
「進貢船」であるというしるしです。

進貢船は、はじめは明の皇帝から贈られていました。尚巴志の時代頃までには、(洪武・永楽年間) 30 隻の船をもらったという記録があります。その後、自力で造船をして進貢船を用意しました。そのうち王国はお金が次第に厳しくなり、船も小型になりました。

模型の大きさは、長さ 3m、幅約 80 cmです。実際の船は 10 倍ほどの大きさでした。この船に 100 人から 150 人のひとたちが乗り込んで、那覇から中国の福州に行きました。順調にいくと一週間くらいで着きました。

今から 600 年以上前の 1368 年に中国で明という王朝が成立しました。明の皇帝は周辺諸国に明の臣下となるように求めました。そして 1372 年、琉球国の中山は中国の明王朝と進貢（朝貢）^{ちようこう} 関係を結びました。明朝が滅びた後、中国では清の時代になりましたが、そのまま進貢関係は続けられました。

進貢というのは、中国の皇帝に貢ぎ物を納めて臣下になることです。進貢の使節を進貢使^{しんこうし} といいます。進貢使は時代によって異なりますが、ほぼ 2 年に一度派遣されました。

進貢船には、おもしろい飾りがたくさんありますが、そのほとんどが航海の安全を祈ってつけられたものです。

例えば・・・

- ①「^{じゆんぷうそうそう}順風相送」→順風（よい風）にのって、無事目的地に着きますように、という意味です。



- ②「三角旗」→黄色に赤丸は首里王府の旗です。ヒラヒラは「炎」を表しています。(赤丸=太陽ということで、好天を期待して掲げられたという説もあります。)



- ③「むか^{ばた}で旗」→嵐を巻き起こすといわれる、竜神のキラいな虫を表しています。

琉球から中国皇帝への貢ぎものとして、馬・硫黄などが贈られ、明からはお返しに鉄器や陶磁器・絹織物などが琉球に贈られました。

同時に貿易品としては日本産の刀や工芸品・東南アジア産の香木や香料・芭蕉布、貝製品などがありました。

当時アジア最大の文明地域であった中国と独占的に貿易ができることや、東南アジアの特産物を売買できることなど、「中継ぎ貿易」によって琉球は多くの利益を得ることができました。



蔡^{さいおん}温などは役人として、程^{ていじゅんそく}順則などは留学生として進貢船で中国に渡り、帰国後大活躍して琉球王国の発展に貢献しました。

ここに展示されている進貢船は、中国との進貢（朝貢）関係を軸に、琉球がおこなった交易のシンボルといえます。

6 薩摩の琉球支配と王国

「(1) 薩摩の支配と琉球使節」の展示紹介



(薩摩による侵攻と琉球支配のコーナー(壁展示)ではじめる)

タイトルにもありますが、ここでは、「薩摩の琉球支配」と「琉球使節」をキーワードとして展示を紹介いたします。

まずは、「薩摩の琉球支配」についてです。第二尚氏王統の7代目である^{しょうねいおう}尚寧王が琉球を治めていた1609年、琉球は日本の薩摩藩(ほぼ現在の鹿児島県)により攻め入れ、武力で抵抗しましたが敗北し、薩摩藩による支配を受けることになりました。



尚寧王は降伏し首里城を離れ鹿児島に連行されました。こちらに展示している「^{りゅうきゅうこくちゅうざんおう}琉球国中山王^{しょうねいきしよもん}尚寧起請文」は、尚寧王^{しまづいえひさ}から薩摩藩主の島津家久

へ宛てられた文書です。^{きしよもん}起請文とは、神や仏に対してあることばを誓い、約束することを記した文書のことです。この文書には、琉球が島津氏に子や孫の世代までながく従うことが記されています。1609年の薩摩による琉球侵攻後、国王以下三司官などからも、薩摩に従うことを約束した^{きしよもん}起請文の提出が続けられました。

その後、尚寧王は琉球に戻ることが許されましたが、王国体制を保ちながらも、薩摩への年貢の納入義務を負うなど、薩摩と琉球は従属的な関係となりました。

(琉球使節コーナー (ステージ展示) へ移動する)



次に、「琉球使節」についてです。琉球は薩摩藩を通じて徳川政権の影響下におかれましたが、中国との国交回復を期待した徳川政権や、進貢貿易による藩財政の立て直しを図った薩摩の思惑が絡みながらも、中国との冊封・朝貢関係を維持しました。薩摩による琉球侵攻後、琉球は中国側から使節団の派遣回数を10年に一度に減らされましたが、後に原則として2年に一度の派遣回数に戻されました。

一方、日本に対しては、徳川将軍や琉球国王の代替わりのあいさつに何う使節団を派遣するようになりました。これを、「江戸上り(江戸立)」^{えどのぼ}といいます。ここには、琉球使節たちが行列を組んで江戸城に登城する様子を描いた行列図などを展示しています。

中国や日本への使節団の派遣は、中国や日本の文化を学びつつ独自にアレンジを加えて高められた琉球文化の成熟にも繋がりました。

7 琉球の身分制度と位階制度

沖縄県は、19世紀の終わりまで琉球王国といい、国王が国を治めていました。

琉球王国時代には、国民を ^{サムレーみぶん}士身分と ^{ひやくしょうみぶん}百姓身分に分けていました。
^{サムレー}士 といっても、日本の歴史にでてくる ^{さむらい}武士や軍人ではなく、また、百姓といっても必ずしも農民とは限りません。

^{サムレーみぶん}士身分の人は、主に都市部に住み、いわゆる公務員として首里王府に務め、百姓身分の人は町百姓と田舎百姓に分けられ、住む地域も別でした。



町百姓は都市部（首里、泊、那覇、久米村）に住み商工業などに従事し、田舎百姓は地方に住み、主に畑を耕して暮らしていました。

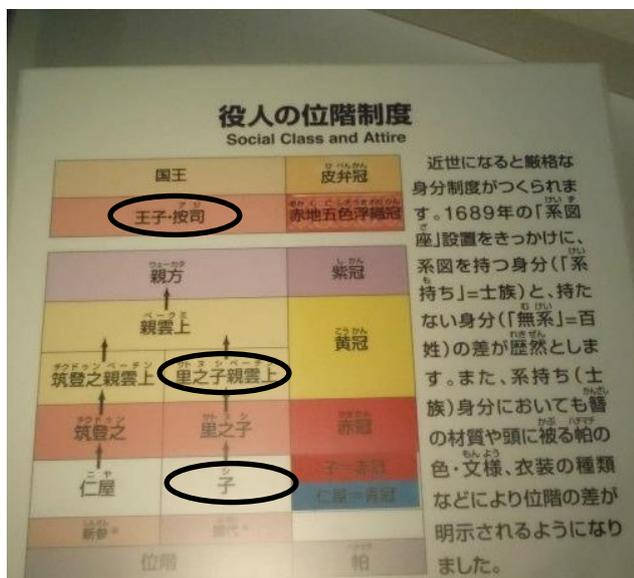
国民（士身分、百姓身分）が儀式に参列する際の着物などは身分によって決められていました。

(4-3-1)

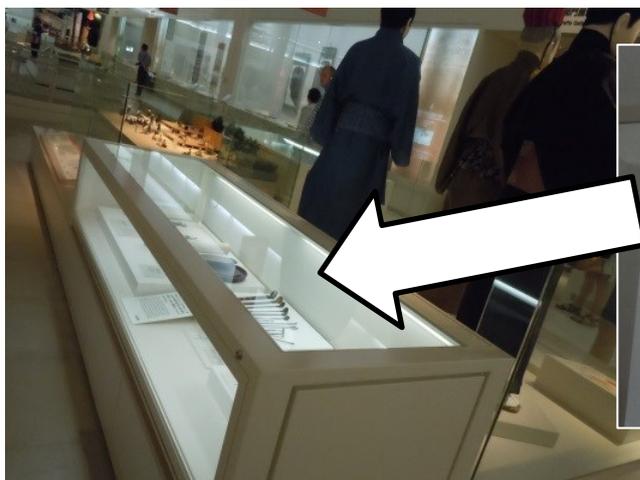
この3体の人形を見てみましょう。首里王府に務める役人です。この3体の人形が着用している冠（^{はちまき}帕）の色、着物の織り方、帯の色などが位の差によって一目でわかるように決められていました。



人形の側にある一覧表は王府役人の階級（位）を表しています。王府の役人は、出身によって初任から位の差がありました。この人形は表のこの階級（位）の人です。



人形の後ろ側にある ^{かんざし} 簪 は、女性だけでなく男性も差していて、性別・身分で分けられていました。かんざしの材質は金、銀、^{しんちゆう} 真鍮、^{べっこう} 鼈甲などに区別されていました。



8 サターヤーとサターグルマ (4-3-3)

<はじめに>

沖縄のサトウキビと砂糖（黒糖）について紹介します。

サトウキビは、現在の沖縄でも各地で見かけることができます。



<模型を見る>

この模型は、約200年前ごろの砂糖（黒糖）づくりの風景を再現した模型です。

この模型の構成は、「サトウキビ畑」「サターグルマ」「サターヤー」になります。

（それぞれの構成を紹介するときには、指を指す）

<サトウキビ畑>

サトウキビの原産地は、インドまたは南西太平洋諸島、あるいはその両方であるといわれています。また、日本に砂糖が初めて入ってきたのは、奈良時代の754年、鑑真^{がんじん}がもたらしたといわれています。

沖縄にサトウキビが伝来した時期は不明ですが、中国を經由して伝わったといわれています。

このような、サトウキビから砂糖（黒糖）を搾り出す過程として、この模型では①サトウキビ畑からサトウキビを刈り取る人、②それらをまとめて運ぶ人、③葉などを取り除いて整える人、サーターグルマまで運ぶ人の様子を見ることができます。



<サーターグルマ>

次にサトウキビから汁を搾り出すところを紹介します。

模型では、馬の動力でサーターグルマを回転させ、サーターグルマを挟んで 2 人でサトウキビから汁をしぼり出す仕事をしている人がいます。

中国の古い記録には、製糖は人間の力だけでおこなっていました。

王国時代のサーターグルマは石製でした。石製のサーターグルマはここに展示しています。（展示しているサーターグルマを指す）



明治 15 年（1882 年）になると、鉄製のサーターグルマも登場しました。

ここで搾り取った汁がサーターヤーに運ばれます。

<サーターヤー>



サーターヤーは、砂糖小屋のことです。ここでは、大きな鍋でサトウキビの汁を煮詰めて、石灰を加えました。石灰を入れることによって不純物を沈殿させて、取り除くことができます。それらを冷やして固めて黒糖の固まりをつくりました。

小屋の中にも働いている人がいますね。(小屋をのぞき込み指さす)

このような製糖法は、1623年儀間^{ぎましんじょう}真常の派遣した使者が中国から持ち帰り、国中に普及させました。

<砂糖(黒糖)の歴史>

王国時代の砂糖(黒糖)は、とても貴重でした。首里王府はサトウキビの栽培を直接管理し、栽培地域を島尻、中頭のほか、国頭の今帰仁、本部、金武、伊江島に限定しました。砂糖(黒糖)は、首里王府以外が自由に売買することのできない「専売品」として管理されており、王府が薩摩を通じて、大阪や京都などに売りさばられました。

サトウキビは明治以降、沖縄の特産品や基幹作物となり、沖縄各地にサトウキビ畑が広がりました。台風にも強く収穫量を増やすために品種改良も進みました。

<エンディング>

サトウキビは、琉球王国時代に儀間^{ぎましんじょう}真常が製糖法を琉球にもたらして普及し、明治以降には県民の生活・文化・経済と深い関わりを持ちながら発展してきました。

沖縄県内には、この模型のような黒糖づくりを体験できる様々な催しや体験教室が開かれています。あなたも一度体験してみたいはいかがでしょうか。

9 琉球王国の衰亡 (5-1)



18世紀から19世紀にかけて、琉球王国は力が衰え危機的状況を迎え、ついには滅亡していきます。そのことをこのコーナーで見てください。

日本では江戸時代の末期にあたるこの頃、長く続いた琉球王国は力が衰えていきます。その主な原因は3つあります。

- ①災害 ②王府の財政の悪化 ③国際情勢の大きな変化



1 番目の災害については、このパネルをご覧ください。この頃、琉球ではたび重なる災害や飢きん、伝染病によって、農村は大変な打撃を受け、生産力が低下しました。

- 例えば、①暴風・干ばつによる被害
②大地震や大津波による被害
③伝染病の大流行による被害
により多くの人が死にました。

苦難が続いた農村では、税金を払わずに逃げたり身売りする者が増加し、村は人口が減りました。

こうして生産力が落ちたことが王国の財力を低下させることになり、王国は財政難におちいりました。

【参考】1771年(明和8年)宮古・八重山の津波で死者1万人以上
※詳しくはPCにて

2 番目の原因としては王府の財政の悪化があります。中国や日本へ使節を派遣したり、冊封使をもてなす費用がかさみ、前代以上に王府は財政が苦しくなりました。

3 番目の理由として、異国船の来琉があります。

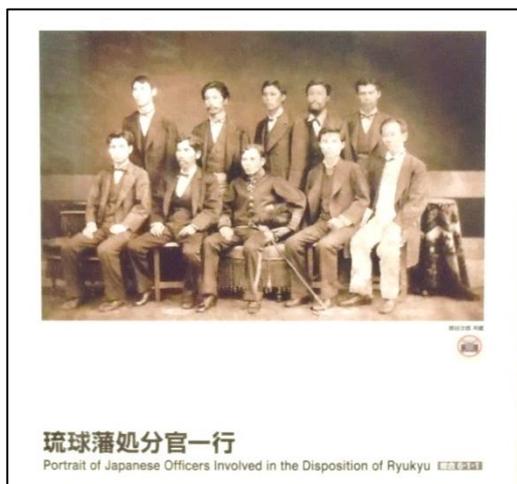
この頃、アジアの進出を目指すイギリスやアメリカなどの艦隊が、琉球にも押し寄せるようになり、1853 年ペリーが琉球に来航しました。ペリー来航は琉球・日本に大きな変化を与えました。詳しくはペリーのコーナーをご覧ください。



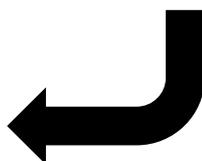
琉球王国の滅亡 (6-1)

いよいよ 19 世紀末、日本では江戸幕府が倒れ、1867 年に明治政府が誕生しました。政府は近代的国家として領土（国の境い）を確定する必要がありました。そこで、琉球王国を日本の領土とする決定がなされ、1872 年（明治 5 年）、明治政府は琉球王国を「琉球藩」にし、日本に組み込みました。

王国は前にも見てきたとおり弱体化していましたが、それでも独自の王国を維持する意志を主張し、明治政府の要求に抵抗し続けました。



上のパネルをご覧ください。明治政府から送られた処分官一行です。



ついに、1879年明治政府は最後の手段として、彼ら処分官一行と軍隊、警察官を琉球に送り、首里城で「琉球藩」の廃藩置県（琉球藩を廃し、沖縄県を置く・・・）の命令を下しました。

下の資料をご覧ください。これは「琉球藩を廃し沖縄県を置く」という明治政府からの通達文書で、重要文化財になっています。



国王 ^{しょうたい} 尚 泰は臣下らと共に首里城を明け渡し、ここにおよそ500年続いた琉球王国は滅び、沖縄県として近代国家日本に組み込まれていきました。

これら一連の出来事を「明治政府による琉球処分」といいます。

左端のパネルは琉球王国最後の王、^{しょう} 尚 ^{たい} 泰です。

【参考】 その後の尚泰

- 1879年に上京
- 東京 ^{こうじまち} 麹 町に2000坪の邸宅 ^{かし} 下賜され、^{かぞく} 華族に列された。
- 金禄公債証書20万円が ^{かし} 下賜される。
- 58歳死去。遺体は ^{たまうどろん} 玉 陵 に葬られた。

10 ソテツ地獄 (6-2-2)



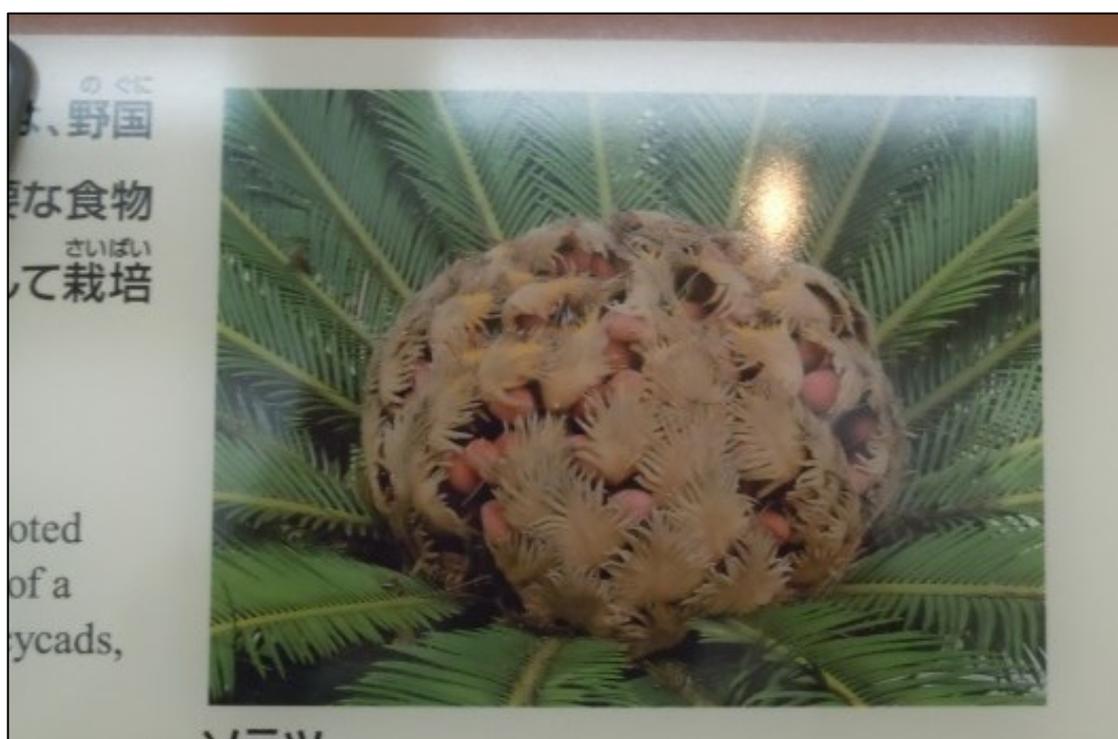
皆さんは「ソテツ」を知っていますか・・・沖縄の山野によく見かけるあのソテツです。庭木にも使われています。このソテツに「地獄」をくっつけて、「ソテツ地獄」という言葉があります。地獄というとなんたか怖い感じがしますね。これから、皆さんにそのソテツ地獄のはなしをしたいと思います。

沖縄は大正の末期から昭和の初期ごろ、たいへんな「不況」の時代がありました。不況というのは不景気のことです。不景気になるといろいろなことが起こります。例えば、生産（物を作ること）が減ってきます。賃金や給料が安くなります。失業者が増えます。物価（物の値段）が下がります。もっとひどくなると銀行がつぶれます。このようなことが、実際に、沖縄でも起こったのです。

沖縄が不況になったのはヨーロッパで起きた第一次世界大戦に原因があります。大戦の為にヨーロッパの国々がアジアの市場から撤退（しりぞく）しました。つまり、ヨーロッパの製品がアジアの市場に入ってこなくなったのです。その結果、日本がアジアの国々への輸出を大きく伸ばして好景気になりました。しかし、その好景気は長くは続きませんでした。戦争が終わるとヨーロッパの経済が立ち直りその製品が再びアジ

アの市場に流れ込んできたからです。そのために、日本の輸出は急速に減少し物が売れなくなって不景気になりました。

沖縄も一時的に砂糖の値が上がり景気のよい時もありましたが、大戦後は砂糖価格が急落し、沖縄経済は大きな打撃を受け深刻な不況となりました。サトウキビは昔から沖縄の重要な農産物でした。サトウキビから砂糖を作ってそれを売って暮らしをたてていました。その砂糖の値段が急に下がってしまったのです。人々の暮らしはたいへん貧しくなり、食べるものもなくなりました。特に、農民は米どころかイモさえも食べることができませんでした。ついには野生のソテツまでも食べて飢えをしのぎました。ソテツの実や茎にはでん粉が含まれているからです。



しかし、ソテツには猛毒があって、調理を誤ると命を落とすこともありました。実際に「中毒死する人が相次いだ」と歴史の本には書かれています。それで、このような悲惨な貧乏の状態を人々は「ソテツ地獄」と呼んだのです。

11 琉球を訪れた異国船 (5-1-2)



琉球は、1609年に薩摩の侵攻を受け、幕府の鎖国政策の中に組み込まれました。そのため首里王府は異国船がやってきたり、難破した船があると王府へ連絡させる目的で各地の高台に見張り所をつくりました。連絡手段は船や早馬のほか

に「のろし」といって草木を燃やして煙を上げる方法がとられました。壁の地図には「のろし」を使った連絡経路が示されています。

19世紀になりますと、ヨーロッパやアメリカは植民地を得るため競ってアジアへやってきました。1840年にイギリスと清（中国）との間でアヘン戦争が起こり、清が敗れました。東アジアの国々では自分たちの国も侵略されるのではないかと不安が広がりました。こうした中、琉球の近くにもヨーロッパやアメリカの船がひんぱんに姿を現すようになり、貿易やキリスト教の布教活動を求めました。



壁のグラフを見ると、1830年代から琉球を訪れる異国船が急激に増えていることがわかります。琉球にとって異国船は迷惑な存在だったので、それらの国と争いになることを避けるために話し合いを長引かせ要求を断ろうとしました。

ところで、みなさんは江戸幕府に開国を求めるため黒船でやってきた人物を知っていますか？・・・

江戸幕府は、1854年にアメリカ合衆国との間で日米和親条約を結んで開国しましたが、ペリーは江戸へ行く前の1853年に琉球にやっています。アメリカは幕府との話し合いをする上での足がかりにするため琉球にやってきたのです。もし、日本との話し合いが失敗した場合は琉球を占領する計画でした。

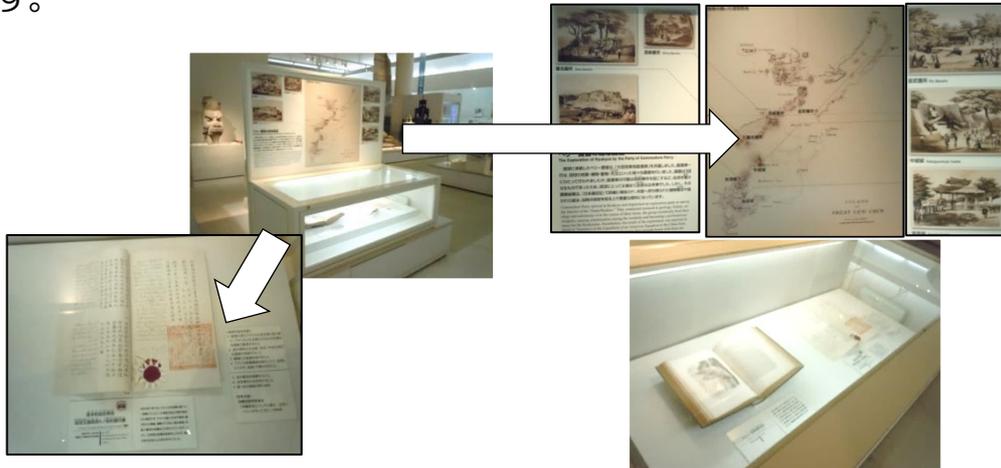
ペリーの琉球来訪と調査



1853年5月にペリーが日本との開国交渉の基地として使用する目的で那覇港に寄港し、石炭を含めた色々な琉球調査を行いました。

ペリーの『日本遠征紀』には「那覇港に停泊するペリー艦隊」、「首里城でのペリー一行の歓迎会」、「首里城」、「牧港橋」、「中城城」、「喜名番所」、「恩納番所」、「金武

番所」など琉球調査時の精密画があり、大変美しい国として描かれています。



日米和親条約締結後の1854年にペリーと首里王府との間でアメリカとの貿易のための条約が結ばれました。それがこれです。

この条約にはアメリカ船への水や食料・薪の補給、遭難船の救助、外国人に基地を与えるなどが記載されています。その後、1855年にはフランスと、1859年にはオランダとの間で同様の条約が結ばれました。

ペリーに贈られた「旧大安禅寺の鐘」が、1987年にペリーが設立に関わったアナポリス海軍兵学校から沖縄に返ってきました。

12 軽便鉄道（6-2-1）

今日は昔、沖縄にあった鉄道のお話をします。

こちらをご覧ください。「沖縄の近代」と書いてありますね。近代というのは明治12年（1879年）の沖縄県の設置から昭和20年（1945年）の沖縄戦が終わるまでのことですが、その後ろに写っている写真に注目してください。これは昔の那覇市内の様子です。那覇に市内電車が走っていたのです。那覇港のすぐそば、通堂から泊を經由して首里山川町、今の首里高校の近くまで、約6.9キロを30分余りで結んでいました。大正3年（1914年）から昭和8年（1933年）までの20年の短い間でしたが市内電車が走っていたのです。発車する時など「チンチン」と鐘を鳴らして走ったので「チンチン電車」と呼ばれていました。



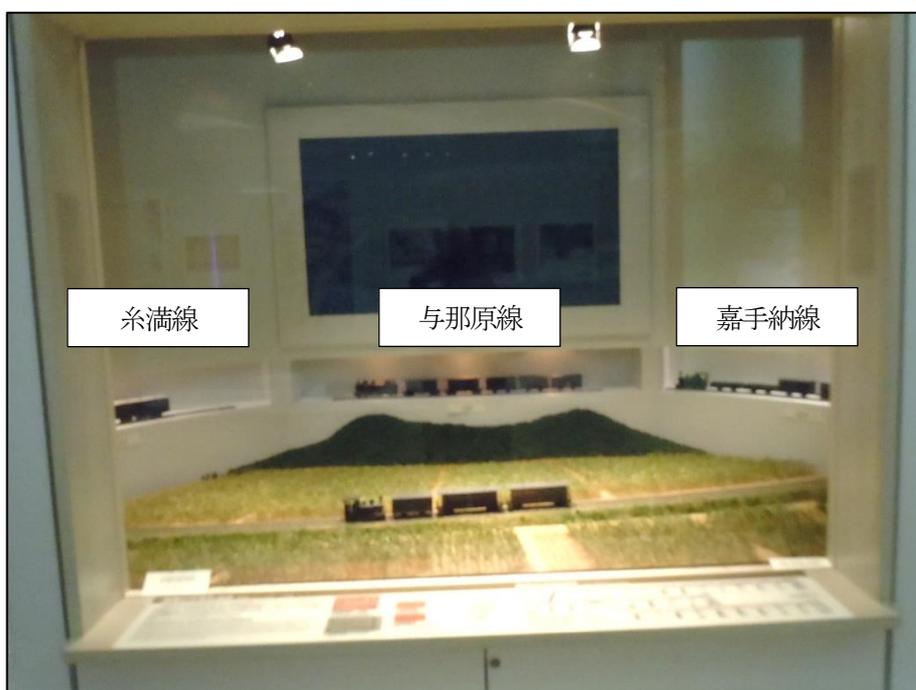
こちらは「ケービン」の模型です。「沖縄県軽便鉄道」と言ったので沖縄の人たちに沖縄なまりで「ケービン」「ケービン」と呼ばれて親しまれていました。「軽便鉄道」というのは線路幅が普通の規格より狭く、レールも細い小型の鉄道です。

スライドショーがあるのでスライドショーを見ましょう。「市内電車」と同じ大正3年（1914年）に与那原線が営業を始めましたが詳しいことはスライドショーで説明がありましたので省略してこちらの模型の説明をしましょう。



これは昭和 10 年代、2,3 月頃の糸満付近の様子をイメージして作った模型です。向こうにちょっと小高い丘があってその手前はサトウキビ畑が広がっています。その間を糸満線的那覇行の列車が走っています。一番後ろの客車デッキに女の人に乗っています。野菜を担いでいて那覇へ野菜を売りに行く様子です。

「ケービン」は、与那原線、嘉手納線、糸満線の 3 つの線路がありました。それぞれに列車のセットが置いてあります。糸満線に乗っているのはガソリンカーです。ガソリンエンジンで走って煙突が無いので電車みたいですね。スピードが速く座席のクッションも良かったので人気があったそうです。



嘉手納線の貨車には砂糖樽が満載です。

与那原線では貨車の扉が開いていて中の積荷が見えます。見にくいのですがこれは材木です。積んでいるものはそれぞれ各線の状況を表現していますから覚えておいてください。

与那原線の機関車は他の機関車と比べると大きいですね。与那原線はレールを太くして輸送量を大きくする改良をしました。嘉手納線、糸満線は改良できなかったなのでこの大きな機関車は走れませんでした。この機関車は与那原線専用だったわけです。

スライドショーでも説明がありました。沖縄戦で大きな被害を受けて「ケービン」はなくなりました。大正 3 年（1914 年）から昭和 20 年（1945 年）まで 30 年余り、大変活躍しました。

13 移民と出稼ぎ (6-2-2)

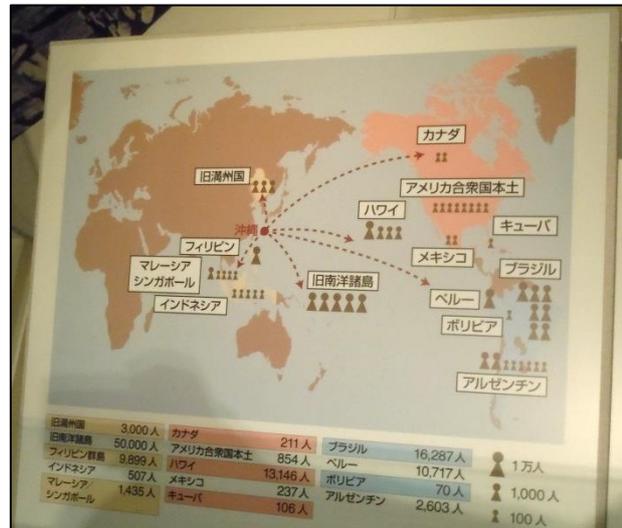
<移民の話>



皆さんは「移民」ということばを聞いたことがありますか・・・。

移民のことを国語事典で調べると、「主に農業などの労働仕事をするために、外国へ移り住むこと」とあります。

沖縄からの海外移民は、100年以上前の明治32年(1899年)金武村(現在の金武町)出身の当山久三とうやまきゅうぞうという人が26人の移民をハワイへ送り出したのが始まりです。その後、多くの沖縄県民が海外へ出ていきました。主な移民先は、この図で示されているように、ハワイ、東南アジア、南北アメリカなどを中心に、全部で24カ国の国及び地域に及んでいます。



移民の数は、この説明書きにもあるように、戦争(第二次世界大戦)前までは7万2000人ほどです。戦後は約3万人といわれていますから、あわせて10万人余りとなります。



移民先からの仕送りのお金は、大変大きな金額でした。そのお金が沖縄に住む家族・親戚の生活を支え、沖縄の経済に大きな恵みをもたらしました。しかし、移民で海を渡った人たちは、一部の成功者をのぞいて貧困に耐えながら働き続けねばなりませんでした。

移民先からの仕送りは、彼らのそのような苦しい生活の中からふるさとの沖縄へ送られたものでした。

また、第二次世界大戦後間もない頃、戦災を受けた沖縄に、これらの移民先から多額の救援金や食料、医薬品（くすり）などが送られてきました。沖縄が苦しかったとき、移民先の人々が助けてくれたのです。そのことも忘れてはならないですね。



移民の歴史も、最初のハワイの移民から始まって、すでに一世紀が過ぎました。2000年にハワイで、2008年には南米のそれぞれの国で、移民100周年の記念行事が盛大に催されました。（5年に1度の「世界のウチナーンチュ大会」の話しにも触れる）

これで、移民の話しを終わります。

<出稼ぎの話>

皆さんは「出稼ぎ」ということばを知っていますか？出稼ぎのことを国語事典で調べると、「故郷を離れて、一定の期間、ほかの所に行って働くこと」とあります。それでは、これからその出稼ぎのことについて、話しをします。

沖縄は、明治の末から昭和の初め頃まで、経済が大変落ち込んで、貧乏のどん底の時代がありました。この時期、多くの沖縄県民が貧しさから逃れるために、海外へ移民として出かけていきました。同じころ、働き口を求めて本土（県外）への出稼ぎも急激に増えました。海外移民よりもはるかに多くの人たちが出稼ぎに行きました。



特に、大正時代の終わりから昭和の初めにかけての、いわゆる「ソテツ地獄」のころが最も多く、毎年2万人の県人が出かけていきました。

この写真を見てください。港で、出稼ぎや移民を見送る人々が写っています。人々の服装や港や船

など、周囲の様子も今とはずいぶん違いますね。

出稼ぎ先は、おもに大阪や神奈川などの工業地帯でした。女性は織物の糸や布を作る工場の女子工員として、男性は工員や日雇い労働者として、雇われました。

長時間の労働、低い賃金、衛生環境が悪いなど、労働条件は最悪でした。そのため、肺結核を患うなど、健康を害して途中で沖縄へ帰ってくる人たちも少なくありませんでした。また、ことばの違いなどから「琉球人」といって、不当な差別も受けることがありました。

出稼ぎの人たちは、このようなつらく困難な状況に耐えて家族への仕送り（送金）を続けました。そのお金が沖縄の貧しい留守家族の生活を支え、沖縄の経済にうるおいを与えたことは、海外移民の場合と同じですね。

これで、出稼ぎの話しを終わります。

14 生活用品が語る戦後（7-1-1）



皆さんは●●年前（終戦から逆算して答える）にこの沖縄で大きな戦争があったことを知っていますか？日本はどここの国と戦ったか知っていますか？その戦争は第二次世界大戦とか太平洋戦争と呼ばれていました。沖縄ではこの戦争で 20 万人余りの人々が亡くなりました。

昭和 20 年（1945 年）戦争が終わると、生き残った住民は米軍の命令により収容所に集められて生活をしましたが、しばらくしてそれぞれ元々住んでいたところに帰されました。

しかし、元の家は焼き払われ、家財道具もなく、何も無い中での生活が始まりました。米軍からは食料・衣類など最小限の配給がありましたが、それでは足りず自分たちで身近にあるものを工夫して生活用品を作り使うようになりました。そのときに作った道具がここに並んでいるものです。



目の前にある鍋、釜、お椀、アイロン、洋服などの日用品を見てください。戦争で使われた武器や米軍が基地内で使っていたものを再利用したものがほとんどです。特に、戦闘機・爆撃機などの飛行機のボディやプロペラ等に使われた軽くて丈夫なジュラルミンを溶かして加工して作



った鍋・釜・アイロンです。陶器や鉄製品が出回るまで大変必要なものでした。これらのものを総称して本物に対して「代用品」と呼ばれていました。

後ろの方にある舟は戦闘機などの燃料タンクを半分にしたものでサバニと呼ばれ小型漁船の代わりに使われました。

また、身に着けるものも米軍の軍服を自分たちに合うように改良して着けていました。それが目の前にある濃い緑色をしたシャツです。



さらに、左側を見てください。カンカラ三線がありますね。カンカラは缶詰の「空き缶」のことですから缶で作った三線を「カンカラ三線」と言います。戦後の代表的な「代用品」ということになるでしょう。沖縄の人たちは苦しい状況をこのカンカラ三線で、今流れている「屋嘉節」等を歌いながら自らを慰め、懸命に生きてきたと思います。

物が無いときの人間の知恵をこれらの道具から考えてみましょう。

15 米軍車両とナンバープレート (7-1-3)

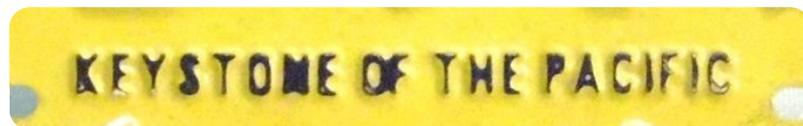
(1) 車両ナンバー



1972年昭和47年に沖縄は日本へ復帰しました。復帰前の沖縄では、米軍関係者の車両ナンバープレートは、沖縄の一般車両のものとは違っていました。沖縄の一般車両は白地に黒文字でしたが、米軍関係者の車両は黄色地に黒の文字でした。いずれも、アルファベットと数字からなっています。一般車両のナンバープレートが車の種類や使い道で区別がなされているのに対し、米軍関係者の車両は、乗る人の身分で区別されていました。現在では米軍の外人車両はYナンバーとして区別されています。

(2) KEYSTONE OF THE PACIFIC

米軍車両には「KEYSTONE OF THE PACIFIC」(太平洋の要石)という言葉が書き込まれていました。これは沖縄が地理的に極東アジアの要の位置にあり、米軍の戦略上、重要な島だという意味です。



コザ騒動 (1970年12月20日)

※復帰の前には米軍人車両に対する取り締まり権は、アメリカ陸軍MP(憲兵)のみで琉球警察にはありませんでした。これが後のコザ騒動に繋がりました。

(3) B円とドル

戦後アメリカ統治下の沖縄は、B円時代とドル時代にほぼ二分されていました。

B円とは、米軍が発行した通貨で、表面にアルファベットのBの文字が印字されていることから、こう呼ばれていました。1948年(昭和23年)7月から1958年9月までの10年間にわたり、沖縄で唯一の法定通貨として使用されました。



1958年にはB円からドルに切り替えられ、1972年5月には日本復帰を境にドルから日本円への切り替えが行われました。(また、A円も一時基地の中で使われていました。1946年7月～9月の短期間、軍人、軍属用に限って発行されたものです。)

(4) Aサイン証

Aサインは、米軍関係者の立ち入りが許可された民間の飲食店や風俗営業店などに発行された許可証のことです。戦後米軍が、米軍人、軍属等への病気の感染予防や食品の衛生などを厳しく検査し、基準を満たした業者に発行されました。許可証には許可済みの頭文字である「A」の表記があり、Aサインと呼ばれました。

最盛期には約3,000軒の米兵相手の飲み屋や、質屋、お土産品店などに発行され使われていました。



掲載した写真(展示資料)は、当時の「沖縄Aサイン連合会」(商工会的組織)が発行したもので、「アメリカ軍が発行したAサイン証」ではありません。ガイドの際は、お伝えに誤りの無いようご注意ください。

(5) オフリミッツ



米軍は反基地の運動が高まると、オフリミッツ（民間地域への立ち入り禁止令）を発して、米兵からの収入に頼る業者を困らせました。そして、反基地運動を進める人々と業者の沖縄人同士を対立させることで、反基地運動を抑えようとした。

(6) パスポートについて

1945年3月に、アメリカ軍が沖縄に上陸してから27年間、沖縄はアメリカの占領統治下におかれました。沖縄の施政権がアメリカから日本に返還されたのは、1972年5月15日のことです。それまで、北緯27度線（与論島と辺戸岬の間）を越えて沖縄から日本本土に渡航するには、米国民政府（USCAR 最高責任者は高等弁務官）が発行する渡航証明書、いわゆるパスポートが必要でした。

しかし、米国民政府（USCAR）を批判したり、日本復帰運動に関わっていた人には、パスポートの発行を許可しないこともありました。また、日本本土から沖縄へ渡航する際にも、日本政府の発行する身分証明書（パスポート）とビザが必要でした。

